

次なる半世紀へ～エネルギーを通じた貢献と持続可能な世界の実現～

ながれ

中島 伸二 (なかじま しんじ/東京ガス株式会社 サステナビリティ推進部 部長)

国内初の液化天然ガス導入から半世紀

2019年11月4日、東京ガスグループは液化天然ガス(LNG)導入50周年を迎えた。公害問題が大きな社会課題となった高度経済成長期の1960年代、当時の経営者が「青い空を取り戻そう」という決意を胸に社運を賭けて挑んだのがLNGの導入だ。それまで主な原料であった石炭や石油と違い、比較的少量のCO₂しか出さない革新的なエネルギーとして登場したLNGは、50年の年月を経て日本の基幹エネルギーの一つになるまで利用が拡大し、今私たちの暮らしと社会を支えている。

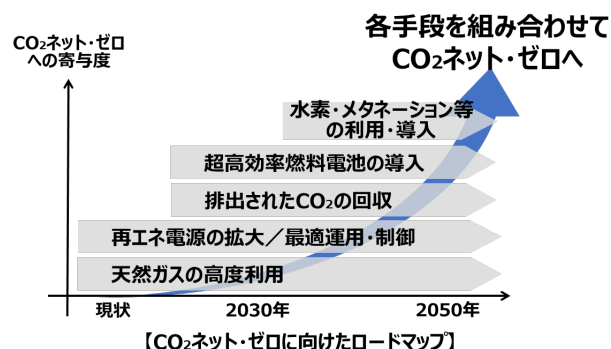
当社グループは、エネルギーの安定供給だけでなく、クリーンな天然ガスを活用したもののづくり、スマートエネルギーネットワークによる都市づくり、燃料電池など新技術を利用した暮らしづくりなど、エネルギーソリューションを通じ、日本で、世界で、この新しいエネルギーの普及拡大をリードし天然ガスの時代を切り拓いてきた。エネルギーで変革を起こし持続可能な社会の実現に挑戦することは、SDGsの精神にも通じる、創業者・渋沢栄一が大切にされた公益追求への高い志であり、当社グループのDNAでもある。

ふたたび新たな挑戦へ

21世紀に入り、気候変動をはじめとする社会問題は深刻化し、脱炭素化が大きな潮流となっている今、SDGsに代表されるように、地球市民として社会や地球の問題を自分ごととして考えることが当たり前になりつつある。また、2015年のパリ協定採択以降、CO₂を排出する化石燃料に対する世界の視線はより厳しくなっている。さらに日本では、エネルギー

の分散化や自由化の進展も受け、さまざまな付加価値型の競争が激化している。

そこで昨年11月、次の半世紀を見据え、不確実な時代にあっても進むべき方向を示す羅針盤として、当社グループは経営ビジョン「Compass2030」を策定し、50年前と同様、新たな挑戦に立ち向かう決意を示した。(https://www.tokyo-gas.co.jp/Press/20191127-01.pdf) 天然ガスは、供給安定性・環境性・経済性のバランスに優れており、私たちは石炭・石油を使用している世界各地のエネルギー源を天然ガスに転換していく。さらに、そのガスも単純に燃やすのではなく、コージェネレーションや面的利用などで高効率に使用し、より低炭素化を進めていくことが重要で、この分野でしっかりと貢献していく。しかし同時に、化石燃料である天然ガスを扱うリーディングカンパニーとして、気候変動と真摯に向き合うことは私たちの責務であり、次なる半世紀に向けて「CO₂ ネット・ゼロに挑戦しリードする」ことを目標として掲げた。再生可能エネルギー活用をはじめ、排出されたCO₂の回収、ガス体エネルギー自体の脱炭素化など、技術的なイノベーションに真正面から取り組み、これら新しい技術と天然ガスを組み合わせ、サステナブルな暮らし・都市・地球を実現するソリューションを提供していきたいと考えている。



連帯により磨かれる多様性、 歴史に学ぶ先進性

ここからは一エネルギー企業の枠を少々はみだし、これからの日本の進むべき道と世界における日本の役割について少し考えてみたい。(※以下は筆者の見解であり、当社の公的見解では無い部分も含む)

昨今の気候変動、いや気候危機と呼ぶべき現況を目の当たりにし、多くの日本人が出来るだけ早期に地球上のCO₂を減らさなければならぬと真剣に考え始めたと思う。

問題は、その「スピード感」と「削減の仕方」だ。

スピードはもちろん早いに越したことは無い。パリ協定やIPCC報告を踏まえれば、理想と現実がかけ離れないよう留意しつつも、CO₂排出を実質ゼロにするゴールの時期を前倒しするアプローチはこれからも重要だ。

一方、削減の仕方だが、無尽蔵にお金を投入し再生可能エネルギーを一斉導入するような極端なやり方で、国家が疲弊したり、今日の生活水準が維持できなくなってしまっただけでは元も子もない。国力の維持は地政学的リスクが高い我が国の安全保障課題にも直結する。また、今日の日本を支えている製造業からのCO₂排出を議論するには、この先の日本のあり方やありたい姿の議論なしには前に進まないと思っている。

加えて、これから人口が増え、日本が過去経験した経済成長ステージに入る多くの新興国は「地球のことよりまず明日の生活」という状況で、そこに対して先進国は自国の削減の仕方を強要できない。国ごとの事情を勘案することが重要だ。無理に押し付けると国家間の分断を生むだけである。

そこで大事なのが、最終的な共通のゴールに向かって、経済性や他のベネフィットも含め国ごとに統合的なロードマップを描くことであり、まさにそれがゴールまでの移行期、「トランジション」の考え方である。そしてそこには、

実効性が高く、費用対効果にも優れる省エネ手法や高効率システムなど、日本の素晴らしい技術や運用の仕組みがフィットするし、特に新興国の現実解には最も有効だと思う。

加えて日本には、江戸の鎖国時代、日本を限られた地球と見立て、その中で「山水郷」と言われる自然の恵みを最大限活用し、エネルギーも食料も資源も全て循環させ持続可能に営む仕組みが既に実現していたという財産がある。社会の仕組みに加え、清貧で徳を重んじる生き方、人間も大きな自然の中の一部の存在にすぎないという東洋思想観、「おすそわけ」に代表される相互扶助のコミュニティーなど、今や失われつつある人生観や世界観も歴史から学ぶことは多い。

これからは分断でなく共存、連帯の時代だ。世界一律ではなく、各々の国が各々に最も適した削減の仕方を進めることが、世界が持続可能でありながらCO₂を最も早く減らせる近道だと私は信じている。

最後に、私は一休宗純（とんちの一休さん）の以下の言葉が好きだ。

「一本筋は通しても頑固になるべからず」

違う意見を持つ者同士が、遠慮せず意見はぶつけつつも、自分の意見に固執するのではなく互いの意見を尊重しながら前に進んでいく。明治以降の日本は西洋文明という見本を見つつ発展してきたが、これからは世界に唯一無二の答えなど無い時代に突入していく。こういう時代には、一人一人が多数派の意見に安易に流されることなく個として未来の姿を考え抜き、その個と個が互いの意見を尊重しながらぶつかり合うことで、昇華・統合し、少しでも全体として良い答えを導き出していくことが最も大事だ。

今こそ日本の培ってきた素晴らしい技術、そして思想や叡智を世界と共有し、持続可能でかつ人間が生き活きと生きられる社会を作っていきたい。